

日記に見る宣教師ニコライの宣教 ——『宣教師ニコライの全日記』出版にあわせて

安村 仁志

はじめに

このたび、ほぼ50年にわたって伝道し、「日本ハリストス正教会」を創設したロシア宣教会宣教師ニコライがつけていた日記の全訳が教文館から出た。筆者はそのうち日露戦争中の1905年から1908年までの部分の翻訳に携わったことから、この日記の内容、客観的意義を紹介するとともに、「宣教」を論点にニコライの宣教活動の諸側面を提示してみたい。ニコライの宣教活動およびその関連事項についての研究は近年進みつつあり、それを紹介する書もかなり出ているので¹、それらも参照されたい。

¹ ニコライ『宣教師ニコライの日記抄』、中村健之介他訳、北海道大学出版会、2000年
中村健之介『宣教師ニコライと明治日本』(岩波新書)、岩波書店、1996年
中村健之介/中村悦子『ニコライ堂の女性たち』、教文館、2003年
長縄光男『ニコライ堂の人びと—日本近代史のなかのロシア正教会』、現代企画室、1989年
長縄光男『ニコライ堂遺聞』、成文社、2007年
高橋保行『聖ニコライ大主教—日本正教会の礎』、日本キリスト教団出版局、2000年
ニコライ『明治の日本ハリストス正教会ニコライの報告書』、中村健之介訳、教文館、1993年
ニコライ『ニコライの見た幕末日本』、中村健之介訳、講談社、1979年
ドミートリー・マトヴェーヴィチ・ポズニェーフ『明治日本とニコライ大主

最初に宣教師ニコライ(イワン・ドミートリエヴィチ・カサートキン、1836—1912)と日本での宣教活動について最小限の紹介をしておかなければならない。サンクトペテルブルク神学大学(1857年入学)に在学中、在日本ロシア領事館附属礼拝堂付司祭の募集を知り、志願して1861年に着任した。まず日本語と日本の歴史等文化を徹底的に学び、1868(明治1)年から布教活動を行い、同年4月2日沢辺琢磨、酒井篤礼、浦野太蔵の受洗により日本における正教の初穂を得た。翌年ロシアに戻り、日本宣教を進める団体(日本伝道会社)の設立を果たした(1871年帰任)。1872(明治5)年には東京に進出し、神田駿河台に本拠を設けた。以後大主教に昇叙されるため1909(明治12)年に帰国した以外は、日露戦争中も含め日本に留まって布教に努めた。一方、漢学者で信徒の中井木菟麻呂らの協力を得ながら祈祷書および聖書(新約全巻・旧約の一部)の翻訳を行った。1912(明治45)年永眠、谷中墓地に葬られた。その時点での信徒総数は3万4千余名であったとされる。この事蹟のゆえ1970年ロシア正教会により「亜使徒・日本の大主教」ニコライとして列聖された。「亜使徒ισαποστολος, ραβνοαποστολννγ)は“使徒に等しい”或いは“使徒に準じた”という意味を持つ東方正教会の称号で²、特定地域での働きに対して贈られているのは日本のニコライのほかではロシアにキリスト教を導入する上で大きな働きをした聖オリガと大公聖ウラヂーミル、アラスカの聖インノケンチイ、グルジアの聖ニーナなど限

教』、中村健之介訳、講談社、1986年
安村仁志「日露戦争時の宣教師ニコライ及びハリストス正教会をめぐる諸問題—1905年の日記から読み取る—」、『エイコーン』(東方キリスト教会紀要)、第29号、2004年
安村仁志「日露戦争期の復活大祭めぐり宣教師ニコライが直面した問題について—『ニコライ日記』から1905年の復活大祭を再現—」、『中京大学図書館学紀要(27)』、2006年
² 正教会で「亜使徒」の称号を与えられているのは、以下の通りである。マグダラのマリア、最初の女性殉教者テクラ(外典『パウロ・テクラ行伝によれば、パウロの弟子で多くのものを異教から改宗させた)、ヒエロポリスの聖アヴェルキウス(200年頃召天)、聖コンスタンティヌス(ローマ皇帝)と母ヘレナ、聖キュリロスとメトディオス(スラヴ世界の啓蒙者)、聖オリガと大公聖ウラヂーミル(ロシアにキリスト教を導入)、グルジアの聖ニーナ、インノケンチイ(アラスカへの宣教師)、日本の大主教聖ニコライ。

られている。その意味でニコライの働きは高く評価されているといえる。

このニコライは来日以来日記をつけていたが、それは 1923 年の関東大震災で焼失したとされていた。しかし、ニコライの後継者のセルゲイ主教（セルゲイ・チホミーロフ）がサンクト・ペテルブルグの宗務院へ送っていた。それを 1979 年ソ連科学アカデミーと日本学術振興会との研究者交換プログラムでソ連滞在中の中村健之介北大助教授（当時、現大妻女子大学教授）が、サンクト・ペテルブルグの中央国立歴史古文書館（現ロシア国立歴史古文書館）に保管されているのを発見された。以来、ソ連側の研究者（科学アカデミー、レニングラードの「北西聖書委員会」のロガチョフ夫妻）及び日本の研究者の協力を得ながら、判読、コンピュータ入力などを経て、翻訳・出版が進められた。1994 年に全日記の約 7 分の 1 が抄訳の形で北海道大学図書刊行会から刊行された（『宣教師ニコライの日記抄』）。次いで 2004 年に全日記のロシア語原文（全 5 巻、4,171 頁）が日本財団の助成を受け、サンクト・ペテルブルグのヒュペリオン社より出版された。その間 19 名が日本語への翻訳に取り組み、このほど教文館から全 9 巻（監修中村健之介、B5 判二段組、各巻平均 380 頁）で出版されたわけである。

I. 『宣教師ニコライの全日記』（教文館）について

先にほぼ 50 年間日記をつけていたと述べたが、最初の 10 年分は関東大震災の折に焼失したようで、今回翻訳されたものは現存する約 40 年分（1870 年から 1911 年まで）である。

内容は以下の通りである。

第 1 巻 宣教師ニコライの全日記についての解説

1870～1880 年（ロシア帰国時の日記含む）、「ロシア帰国時の日記」の
 註解

第 2 巻 1881（明治 14）年～1891（明治 24）年 8 月

第 3 巻 1891（明治 24）年 9 月～1894（明治 27）年

第 4 巻 1895（明治 28）年～1897（明治 30）年 6 月

第 5 巻 1897（明治 30）年 7 月～1899（明治 32）年 6 月

第 6 巻 1899（明治 32）年 7 月～1901（明治 34）年 6 月

第 7 巻 1901（明治 34）年 7 月～1903（明治 36）年

第 8 巻 1904（明治 37）年～1908（明治 41）年

第 9 巻 1909（明治 42）年～1911（明治 44）年

これに、ニコライの略年譜、正教用語集、日記に登場する人名の索引、正教会布教地図が資料として添えられている。

個人がつける日記には、本人の行動だけでなく、その都度考えたことが綴られていることは言うまでもないが、ニコライの日記でも苦勞・悩み、喜び・悲しみ、憤り、不安、願いなどが率直に語られている。また、私的な“情報”が多く含まれている。そこには、一般の、公式的な情報では知ることのできないものを知らしめるものがある。一方、公開を前提にして書いたものではないため、後世読む者に意外な反応を起こさせるようなものもあろう。また、誤解も混じっていよう。ニコライの日記もそうした側面をもってはいるが、宣教師としてその都度自身の行動、身の回りの動きを記録しておくという要素が一般の日記より強く、ロシアの政府・教会への報告書作成のための記録という側面が強く見られるものと思われる。その意味で、宣教師の日記には歴史的資料としての価値もあろうが、ニコライの場合は日本でのキリスト教の活動においてプロテスタント教会、カトリック教会に比して知られるところの少ない正教会の宣教師であることから、キリスト教全体の歴史を見る上でも、一般史を補う上でも貴重なものとなっている。

具体的には、まず、北海道から九州まで日本のほぼ全域を巡回したニコライが日記に見聞きしたことを記録していることが上げられる。後に触れるが、初期の時代から各地への布教はニコライの弟子たちが積極的に行った。それも都市部というよりむしろ農村部に入っていく。そういう地域をニコライはくまなく回ったのである。そして住民の生活の様子、地域の産業などについて細かく書きとめている。それは外国人宣教師であるがゆえの好奇心からと片付けるべきではないであろう。日本語をしっかりとマスターし、さらに日本の歴史・文化などを深く学んで日本人・日本の生活について理解しようとして布教したニコライならではのことであったように思われる。

また、足尾銅山事件といった日本の“事件”についての記述もある。母国ロシアに関連した事件が日本で起こったことについては、当然のことながら

苦勞し、また苦悩したが、そのことが日記に物語られている。それは、ロシアの皇太子ニコライが日本滞在中巡査津田三蔵に切りつけられた1891年（5月11日）の天津事件であり、より苦悩したのが、帰国せず日本で迎えた日露戦争（1904-1905）であった。日露戦争期に日本に残ったニコライの記述は、戦争当事国の人間が公使等外交官不在のなかで対戦国に身をおいて、何をどのように見聞きし、どのような行動をしたのかを物語るものとして一般史にとっても貴重な価値を有する。同時に、正教ならではの事柄がさまざまな形で提示されている点でも重要である。

また、開港とともに幕末から明治に諸外国からさまざまなキリスト教団体が宣教師を派遣し、布教に努めたが、ロシアからの正教の宣教については一定の研究資料があるものの、その独自性についてのアプローチが十分であるとはいえないところで、正教独自の宣教に関する方針や具体的進め方について日記から読み取ることができれば、われわれプロテスタント福音主義の立場にとって、何らかの教示を得られることも期待できよう。

II. ニコライの伝道とはどのようなものであったか

(1) 初期の宣教

日本における正教会の歴史の始まりは、1858年箱館（1869年より函館）にあることは言うまでもないが、ごく簡単に概要を述べておく。

箱館は江戸時代に高田屋嘉兵衛が拠点とした蝦夷地交易の場として栄え、松前藩の役所も置かれていた。1858年江戸幕府がアメリカを始めイギリス、フランス、オランダ、そしてロシアとも修好条約を締結したことで、箱館は開港した。早速箱館には、那覇で日本語を学んでいたカトリックの司祭メルメ・ド・カション（Merumet de Cachon）が宣教の拠点を置き、1859（安政6）年に教会を創設している（現在の函館市元町15-30カトリック元町教会）。ロシアもプウチャーチンを派遣して日本との通交を求め、1858年8月日露修好通商条約を結び、箱館に領事館を開設した。初代領事ゴシケーヴィチとともに、領事館付司祭として長司祭ワシーリー・マーホフが着任したが、二年ほどして心臓の病が悪化して帰国した。ゴシケーヴィチはロシア宗務院（国教制度の下での正教会の監督官庁）に後任の派遣を要請することになるが、その

際やがて日本でキリスト教の宣教ができる日が来ることを予測して、神学大学を終え、学問的素養も備え、人格的にも優れた宣教師としての働きのできる人物を要望した。こうした求めに応じてやってきたのが25歳の修道司祭ニコライだった。キリシタン禁制の高札が撤去され、禁教政策に終止符が打たれたのは、1873（明治6）年であった。したがってそれまでの間ニコライはその“時”が来ることに備えて、日本語の習得、日本の歴史・文化の理解に努めるとともに、ロシア本国に働きかけて日本宣教のための組織を創設していった。すなわち、1869（明治2）年初めにロシアに帰国し、約2年間宗務院や正教会の有力者に日本宣教団の設立を説いて回り、1870年4月6日（ロシア暦）「日本伝道会社（宣教団）」が設立され、伝道会社社長に任ぜられたのであった。これにより、宗務院からは毎年6000ルーブリの宣教資金が送られてくることになる（この他にも1865年に異教徒への宣教を支援することを目的に設立されたロシア正教会と民間人との組織である正教宣教協会からもそれを上回る資金が送られてくるようになる）。1871（明治4）年春に函館に戻ったニコライは翌年全国への宣教を視野に東京に出るのである。函館とプロテスタントとの関係で言えば、ニコライが東京へ出た後の1873（明治6）年末にアメリカ・メソジスト監督教会の宣教師ハリス（Merriman Colbert Harris, 1846-1921）が来日し、翌年初めより函館で伝道を開始し、函館美似教会（プロテスタント教会では、国内3番目に古いとされる）を設立した。このハリスは、1876（明治9）年8月14日（旧暦）に開校した札幌農学校の第二期生の内村鑑三、新渡戸稲造などに洗礼を施したことで知られる。

ニコライが函館にいた間は、日本人のキリスト教信仰は禁止されており、表立った宣教はできない状態にあったが、実際はどうであったのか。1865年にニコライを打ち負かさんとして乗り込んだ沢辺琢磨が最初の正教徒になった。熱血漢であった沢辺は、正教を勧めて回るものとなった。そして彼を通じて、函館にいた医師の酒井篤礼、浦野大蔵が信仰を持ち、三人は1968年5月秘かに洗礼を受けた（聖名は沢辺がパウエル、酒井がイオアン、浦野がイヤコフ）。身の危険を感じ、ニコライの指示で沢辺と酒井は函館を脱出して下北半島の大間に逃れた。浦野も宮古近くの郷里に潜んだ。

こうした関係で北海道及び東北地方には多くの教会が生まれていったので、

初期の宣教活動の実態をみるため概観しておきたい。函館が起点となるが、今日の上磯ハリストス正教会（上磯郡上磯町）は函館教会の青年信徒キリール大村徳松が最初の種を播き、伝教者ダミアン五十嵐と伝道を開始した結果、1876（明治9）年3名の受洗者が生まれたことで成立した。道東地域への宣教は明治20年代に始まった。最初は伝教学校を卒業したばかりのシモン東海林勇次郎が派遣され、1888（明治21）年に6名の受洗者が生まれて根室教会の母体ができた。釧路には1891（明治24）年修道司祭アルセーニイがモイセイ湊という信徒を伴って入り、初穂を得た。標津の教会の始まりは、屯田兵としての入植者が1897（明治30）年に洗礼を受けたことにあり（現在上武佐ハリストス正教会）、網走教会は1905（明治38）年の伝教者マクシム小畑喜三郎の派遣に起源を持つ。オホーツクに面する斜里町に教会が誕生したのは、1915（大正4）年のことであった。札幌地域への宣教は、1880（明治13）年代に入ってから伝教者により始められ、84年に毛筆の製造販売に携わる一人の熱心な信徒が定住したことで司祭の巡回が可能となり、新しい信徒も増えていった。そして1888（明治21）年8月、南1条西3丁目に、函館の小松司祭の管轄下に伝教者が専住する教会（講義所）が開かれた。小樽は、すでに信仰を得ていた信徒たちが1891（明治24）年巡回してきたニコライと修道司祭アルセーニイの指導を受け、講義所を設けたことが始まりである。苫小牧の教会は、幌向に入植してきた宮城県涌谷出身の佐羽内黄吉が1879（明治12）年沼部愛之助によって導かれ洗礼を受けたことに淵源を持つ。その子イリネイ良介が1918（大正7）年苫小牧に移住し、自宅を祈祷所にしたことで苫小牧教会が開かれた。

こうして、ニコライが東京へ出た後、後述する“伝教者”という独特の立場の伝道者と熱心な信徒たちの働きにより教会の礎が築かれていき、遠く道東の地域にまで宣教がなされたのである。ニコライに代わっては修道司祭のアナトーリイが指導した。

開港都市函館における幕末以来のキリスト教各派の活動についても概観しておきたい。

カトリックでは、1859年に上述の宣教師メルメが来たり、病人に医薬を与えたり、フランス語を教えるなどの活動をおこなった。アイヌ地区も訪れて

いる。しかし、明治に入って新政府軍と旧幕府軍との箱館戦争（1868-1869）で町が騒然となるなか、攘夷派の異人狩りもあって人々が近づかなくなると、メルメは派遣団体のパリ外国宣教会を離れて領事になり、数年後帰国した。1868年に来た宣教師ムニク、アルンプリュステもが五稜郭をめぐる戦いの中で英仏の軍艦に避難し、いずれもしばらくして函館を離れた。時を経て、1875年宣教師マランが着任し、2年間で100名余の信者を得て、聖堂建設につながったという。マランは1878年シャトル聖パウロ修道女会を招き、孤児院、裁縫塾（現白百合学園）を開設した。1884年には宣教師ベルリオーズが来て、主任司祭となり、アイヌ人伝道にも熱心に取り組んだ。関連して北海道におけるカトリック教会の展開をみると、札幌（1881年）に続き、小樽、室蘭、白老、広島、倶知安、岩見沢、旭川に教会が設立されていった。北見地区（現在北見、美幌、網走、遠軽、紋別の5教会）での伝道は最も早いところで1930年頃からで、大半は戦後である。苫小牧地区（現在8教会）では、1894（明治24）年に成立した函館司教区のもとに同年恵まれない状況にあったアイヌへの福音宣教の目的で室蘭教会が設立された。正教会の宣教が及ばなかった旭川を中心とする道央には比較的多くの教会（現在17）が設立された。函館地区には函館のほか江差、当別（上磯郡）、八雲（山越郡八雲）に教会がある。幕末から明治にかけてカトリックの宣教活動の一部が函館に及んだにもかかわらず、社会不穏の中で宣教師は函館を離れ、再び活動が始められたのは禁教が解かれたあとであった。ニコライの方はこの間領事館付司祭として守られつつやがて来ると信ずる布教のできる時を見据えて日本語と日本文化の習得、ロシア本国に日本宣教に対する支援体制を作り上げていったのである。長期的展望に立ち、慌てず、あせらず準備をしていったとでもいえようか。

プロテスタントの場合、先に触れたハリスの活動のほかでは、現在北海道に多い日本キリスト教会について言えば、仙台以北に長老派の教会はなく、北海道初の教会が函館に建設されたのは1883年であった（現在の函館相生教会）。函館師範学校の英語教師桜井ちかの夫桜井昭恵の働きによるものであった。ルーテル教会の北海道での宣教が始められたのは1916年であった。聖公会は、1874（明治6）年5月にイギリス人の司祭デニングが来函して活動を

開始し、6月には14名の礼拝出席者があったと記録されている（函館聖公会の始まり）。1878（明治11）年に最初の教会が建設された。その後の宣教で生まれた教会は、札幌、岩見沢、美唄、苫小牧、帯広にある。

これらを見る限り、正教と他教派の宣教活動はそれほど重なってはいないようである。

(2) 宣教の方針に関して

1912（明治45）年2月ニコライは永眠したが、その時点での正教の教勢は大聖堂1（神田のハリストス大聖堂）、聖堂8、会堂175、主教1名、司祭34名、輔祭8名、伝教者115名、信徒34,111名であった³。こうした事蹟を残したニコライの宣教方針に関して、その特徴を挙げてみたい。

A. 日本人伝道者による伝道

ニコライは「日本の（正）教会は日本人伝教者たちの事業である」との信念をもっていた。そのように宣教を進め、宣教の成果についてもそのように把握していた。上記の教役者の数においても伝教者が群を抜いている。では伝教者とは何か。主教－司祭－輔祭の三区分から成る聖職者の職制には入らない、日本の正教特有の身分のようである。布教を志す信徒に一定の神学教育を施して送り出すのであるが、決して多くはないものの給料が支給された。伝道に携わる無給の信徒と聖職者の中間的位置にあるように見える。神学校を卒業した者が聖職者として採用される際の前段階として伝教者になることがあったことからすれば、聖職者見習いの面もあったようである。ともかくもニコライはこうした身分の伝道者を伝道の最前線に送り出していった。また、彼らも貧困に耐えながら日本の隅々に伝道していった。初期の段階では北海道・東北・関東などで彼らは目覚ましい活躍を見せた。二、三例を挙げる。宮城県北部に位置する高清水（現在は栗原市）の場合、1873（明治6）年8月に伝教者パウエル津田（徳之進）が面識のあった高清水の旧領主石母田備後の紹介を得て、当時築館と高清水の小学校長を務めていた針生大八郎（後に司祭となる）を訪ねて正教を伝えたのが伝道の始まりであった。その針生は

子と共にキリスト教への協力を理由に教職を罷免されると、上京してニコライより洗礼を受け、伝教者となっている。この間、高清水には伝教者イオアン酒井、ティト小松、パウエル田手、イオアン小野、マトフェイ影田など（いずれも後に司祭になる）が津田伝教者を助けた。秋田県大館市にある北鹿ハリストス正教会は函館教会の伝教者アレキセイ山中友伯（1841－1917）の伝道によって生み出された。後にここの聖堂を建てた畠山市之助なる人物は耶蘇教の伝道者が来たことを知ると、村の事務を取っていた赤平操に教えを探るよう願ったところ、その赤平が話を聞いて受け入れ、畠山にも勧めた。当初代々の伝教者であることを理由に拒んでいた畠山も伝教者アレキセイ山中、パウエル赤平の熱き伝道により洗礼を受けるにいたり、この地の教会の礎ができたのであった（北鹿ハリストス正教会曲田福音聖堂HPより）。仙台に正教の伝道が始まったのは1869（明治2）年のことで、1871（明治4）年11月にはニコライの命を受けて、小野莊五郎、高屋仲、笹川定吉が伝教者として函館から仙台に戻って伝道を開始した。市内4ヶ所に講義所を設けて、百数十名の求道者を集めるにいたったが、翌年5月2日には「邪教を伝えて国禁を犯すもの」として前記3名及び伝道を応援するために仙台に来た沢辺琢磨をはじめ14名が投獄され、信徒約120名が禁足の刑、親戚預りの刑を受けるという迫害を受けた。

神学校を卒業して伝教者となり、その後輔祭－司祭となっていくケースを一人紹介する。松本高太郎（1866年上総久留里新町生まれ）は、1883（明治16）年ニコライ堂にて佐藤秀六司祭から洗礼を受け、同年正教神学校に入学し、1890（明治23）年卒業した。すぐ副伝教者となって浅草教会に赴任した（月給は12円だったという）。その後、足利、館林、宇都宮、郷里の久留里、八王子、東京などで奉仕した。1915（大正3）年7月1日輔祭に叙聖され、続いて8月28日司祭に昇叙され、東京四谷、千葉県東葛飾郡の手賀で奉仕した後、1919年休職を出願し、陸軍通訳となった。松本は明治から大正期にかけて多くの宗教書の翻訳を行った（「正教新報」を出していた愛々社では翻訳、編集補助に携わった。翻訳したものは「正教談 詰難弁駁（再版）」、「教会祭日問答」、「公祈祷講話」、「須氏教会史」、「神の観念の本源を論ず」、「真理の弁証」、「神の役者の聖任」、「聖大ワシリイ教訓抄」など）。ニコライに宣教師の心得を教え

³ 柴山準行編『大主教ニコライ事蹟』、日本正教会総務局、1937

た後のモスクワ府主教インノケンチイがその名を得た、「シベリアの教化者イルクトツスクの初代主教聖インノケンテイの伝」も執筆している。ニコライ日記にも金口イオアの著作集の翻訳に携わったことが記されている。

このように伝教者たちは伝道の尖兵となっていたのである。本格的に伝道を開始して8年目の1878年12月にニコライは日本伝道に関する報告書を作成し、ロシアの正教宣教協力会評議会に提出したが、同年開かれた公会の時点での信徒数は4,115名としている⁴。この年の7月に5名が司祭に叙聖され、それ以前の1名を加えて、パウエル沢辺(函館)、イオアン酒井(盛岡)、マトフェイ影田(佐沼)、ティモフェイ針生(高清水)、イアコフ高屋(大阪)、パウエル佐藤(東京)と司祭が6名となっている。また伝道管区は日本全体で31(東京、岩手及び宮城地方、宮城地方=仙台・古河、蝦夷島、岩手地方=盛岡ほか、青森地方=三戸ほか、青森地方=八戸、秋田地方、栃木地方=佐野・上野ほか、宮城地方=石巻、宮城地方=上下堤ほか、福島地方=福島、福島地方=白河、栃木地方=西沢、栃木地方=喜連川、群馬地方=前橋、群馬地方=高崎・足利、^{しもおさ}下総地方、神奈川県地方=小田原、神奈川県地方=八王子、伊豆地方、愛知地方=岡崎、愛知地方=名古屋、愛知地方=豊橋、静岡地方、和歌山地方、大阪、備前地方、四国・阿波地方、九州・鹿児島地方、横浜)⁵、正教徒が住んでいて布教がなされている町村の数は約150に及んでいる。公会で正式に認められた伝教者が73名、公会後に認められたものが5名の計78名(その内伝教者が27名、残りが副伝教者)であった。これらからは、布教のみごとな進展ぶりと伝道体制の整備が見られる。その2年後の1880(明治13)年の教勢は、信徒総数6,099名、主教1名、掌院1名、司祭6名、輔祭1名、伝教者79名、教会96、講義所263となっており⁶、伝教者の多さが目を引く。伝教者は初期には士族出身者が多く、当時としては学識経験者であった⁷。初期の伝教

⁴ 中村健之介編『明治の日本ハリストス正教会』、教文館(原題「在日本宣教師団団長掌院ニコライの正教宣教協力会評議会への報告書」)、12頁

⁵ 前掲書、13-22頁

⁶ 牛丸康夫『日本正教史』、日本ハリストス正教会教団、1978、66頁

⁷ 最初に洗礼を受けた沢辺、酒井、浦野に続いて、函館で正教に帰依し、伝道に邁進していったのは、金成善兵衛、新井常之進、高屋仲、小野荘五郎、笹川定吉ら仙台藩士が多かった。

者たちは伝道への思いに燃えていたと同時に相当優秀であったことがうかがえる。ちなみに、1885年には信徒総数が12,546人になり、5年で倍になったわけで、相当な勢いがあったといえよう。

一方、宣教師の数はきわめて少なかった。多いときでも4,5名であった。

B. 伝道者の養成

日本人による伝道を考えていたとすれば、伝道者の養成が重要な課題となったことは言うまでもない。どのようになされていたのであろうか。

1871(明治4)年ロシアから戻ったニコライは徐々に弟子たちに教育を施し始めるが、一部のものにはロシア語を学ばせた。それはそれまで中国語に翻訳された正教関連の書を用いていたのをロシア語から直接訳して用いるようにすること、ロシア語ができるようになったものをロシアの神学校に留学させ、正教神学を学ばせるためであった。

東京に出ると、伝道学校を開いた。大阪を中心に関西地方にも布教活動が始められると、大阪に伝教学校が設けられている。1875(明治8)年7月12日に東京で28人が集まっての第一回公会が開かれた。その時点では日本人司祭はいなかったから伝教者たちの集まりであったのであろう。1878年来日したカザン神学大学出身の修道司祭ウラジーミルが教育に大きな働きをした。函館の伝教学校で学んでいたところを東京のニコライのもとに向かい神学教育を受け、後に長司祭となった三井道郎(1858-1939)の回顧録によれば、ウラジーミル神父が露語学校の校長兼教授となった頃から露語学校という名称を廃して神学校と称するようになった⁸。三井は1876(明治9)年露語学校生となっている。神学校の生徒としては二期生の三井は1883(明治16)年卒業後ロシアに留学し、キエフ神学大学で学んだ。神学校では7年制の神学教育がなされ、ロシア語での正教訓蒙(カテキズム)、正教会の歴史、旧新約聖歴史、聖書学、基礎神学などが教えられた。

78年の報告書によれば、東京の宣教師に伝教学校、神学校、女学校、下級聖職者学校、函館に男児・女児のための学校があった。伝教学校について、ニコライの報告書からひろってみると、将来伝道者となるに必要な資質を備えていると地方の伝教者が推薦したものが入学した。年齢は、16歳から60歳

⁸ 牛丸康夫『日本正教史』、63頁

までと幅が広がった。修学期間は1年で、生徒は基礎神学、聖書解釈など一日二科目の授業を受けた。半年ほど経つと、優秀な生徒は伝道の実地訓練に出た。各地で伝教者が求められており、都市部の伝教者たちは各地に出かけていったため、彼らが都市部の伝道地で伝教者の代わりを務めたようである。生徒たちは必要最小限の学びをしたところで、伝道の前線に出るという生きた訓練を受けることで伝道の一翼を担っていったのである。1978年のリストによると、年齢構成は10代が8名(16歳の少年が1名特例として入っている)、20代が16名、30代2名、50代2名となっている。彼等の教育・指導にはニコライ自身があたった。

これに対し、神学校は14歳から16歳までの信者の男児が学ぶところで、修学年数は6年であった。入学試験が実施され、漢文の素養が問われた。1年目から4年目までは神学関係の科目よりもロシア語、漢文、和作文、算数・代数、地理、物理、心理学など今日で言う一般教育科目を幅広く学ぶようになっていた。5年目になって聖書学、聖体礼儀学(礼拝学に相当)、神学、教会法、教父学などが教授された。神学中心の教育ではなく、幅広く教養をしっかりと身につけさせる方針があったことがうかがわれる。きわめて高い見識が示されているといえよう。彼らは、優秀な場合は将来の神学校教師、その他の者は伝教者を経て輔祭、司祭という聖職者になるのであった。

1875(明治8)年からは女学校が開設された。入学者は司祭や伝教者の娘や縁者が多かった。若い伝教者で結婚しようとするものは婚約者を女学校に入れて宗教教育を受けさせることもあった。女性に伝道する際、妻がよき働きをするようになるためであった。基礎的な神学と一般教育が施された。1978年のリストを見ると、下は11歳からほとんどが10代であり、先に挙げた司祭6名のうち5名の娘、伝教者5名の娘、婚約者、妹、姪などがいた。

C. 翻訳活動

聖ニコライの偉業の一つには聖書、諸祈祷書の翻訳があげられよう。中井木菟麻呂とともに聖書、聖典の翻訳を行い、日本正教会の体制形成は、これらの出版によって築かれていった。1885(明治18)年に旧約中から「聖詠経」(詩篇)が、明治1901年に「新約聖書」が出ている。また、祈祷書では1884年「時課経」、1888年「小祈祷書」、1894年「奉事経」(司祭や輔祭が徹夜祷や

聖体礼儀などの祈祷をするときに用いる、祈祷の流れと基本的な祈祷文と動作が記されている)、1895年「^{せいじじょう}聖事経」(諸奉事の諸祈祷書)、1904年「^{さんかさいけい}三歌斎経」(復活大祭前の四旬齋期とその準備期間の奉事用)、1910年「^{ほつちようけい}祭日経」、「八調経」、1909年「^{れんげつ}連接歌集」と次々と出版されていった。ニコライがこうした聖書・祈祷書の翻訳に精力的に取り組んだのは、来日途中に会ったアラスカ宣教の父と称され後にモスクワ府主教となったインノケンチイから、土着化を図るためには翻訳が大切であることを助言されたからであった。1868(明治1)年10月にそのインノケンチイに宛てた手紙によれば、当初は漢文から、『四福音書』、『使徒行実』、『使徒の公書』、『使徒パウエルの書札(パウロ書簡)』若干、『聖史略』、『教の鑑』、『教理問答』、『朝夕の小祈祷書』が訳され、スラブ語から『啓蒙礼儀』と『帰正式』を訳したようであるが、その後中国語の聖書テキストに疑問を抱き、ロシア語訳、教会スラブ語訳をもとに、ギリシア語訳、ラテン語訳、英訳聖書も参照しながら訳していった。その際、ニコライが目指していたのは、神学用語の翻訳にあたって誤解を与える余地のある既存の概念ですませることはしないこと、古典的であるほど”正しい”言葉であり、安易に簡易化するのは言語の崩壊に通ずるという考え方に立ち、信徒の教養が高まることを期待して、難解な表現であっても荘重な文体を採用したことである。

D. その他

①ニコライの宣教地巡回

ニコライは熱心に宣教地を巡回し、日本の隅々を訪れた。それぞれの土地の伝教者の報告を聞き必要な指示を与え、信徒を励まし指導するだけでなく、教会から遠ざかっている信徒は訪問して呼び戻しもした。伝道も積極的におこなった。さまざまの人に会う旅であったから、日記には出会い、地域の生活実態などが具体的に詳しく記されていった。

1881(明治14)年5月から7月にかけてニコライは上州、東北を46日間かけて巡回している。前橋、高崎、安中、新川、水沼、足利、宇都宮、白河、福島、仙台、上下堤、石巻、涌谷、高清水、佐沼、沢辺、一関、岩谷堂、盛岡、福岡、八戸、山中、湯瀬、一本木、川内、山田、釜石、盛村、大原、藤沢、市津川、横山、小野、白石、本宮、芦野、宇都宮で日記を記している。

これらの土地の伝道の経過・現状、信徒の数・信仰、会堂の有無など教勢、土地の生活状況が具体的に書かれている。東京に移ってから北海道を時々訪ねている。1891（明治24）年（例えば、この折りアルセーニイ修道司祭とともに巡回した小樽では、既にそこに在住している信徒らと共に会堂設立の相談がされ、同年講義所が開かれてパウエル松本伝教者が札幌より着任している）、1898（明治31）年（函館、根室を経て色丹島まで巡回旅行をしている）などである。1882（明治15）年の東北地方巡回、1893（明治26）年の信州・北陸巡回、1891（明治24）年の九州巡回などもある。

筆者が翻訳した部分から地方巡回の様子に一部触れてみたい。松山の教会成聖式（1908年8月16日）に出たあと、東京へ戻る途中隠岐で沈んだロシア人水兵の墓を訪れようと島に向かったときのことである。広島、岡山を経て、津山に立ち寄った。そこでは伝教者がほかに移って不在であることを考慮して、信徒たちと会って励ましている。そのあと米子までは人力車で向かった（25里を1昼夜と3時間かけて）。ここでも教会を訪れ、信徒たちと教会をいかに活性化するかについて話し合いをした。14年前に訪れたときと比べて成長が芳しくなかったからである。信徒が自分でも信仰の話をするように説き、それが彼らの信仰をも元気づけ、蘇えらせる、などとも話した。そして境港から隠岐の島へ向かった。目的であったロシア人の墓を訪れるなどして翌日には帰途についた。境港に戻り、さらに船で舞鶴へ、そこからは鉄道で大阪へ行った。東京行きの列車を待つ間、その伝道所を訪ね、教会建築について話し合っている。寸暇を惜しんで行く先々で信徒たちを訪ねて彼らを励まし、抱えている問題について指示を与えているのである。1912（明治45）年に76歳で亡くなっているから、72歳だった。高齢、且つ強行日程にもかかわらず熱情の感じられる旅であった。

②他教派との関係

ニコライと他の教派との関係はどのようなものであったろうか。函館時代もカトリックの宣教師の動きについては注視している。1868年7月に書いた「日本もまた稔りは多い一箱館のロシア人からの手紙」にカトリックの宣教師が小さな祈祷書を携えて町を歩きながら朗読していること、散策の途中には日本人に話しかけ、さらに話を聞きに来るよう誘いかけることを記し、

それを“正しい”伝道と評価している。彼ら宣教師が立ち寄った5軒に1軒でも彼らを迎えてくれれば大きな収穫になっていくというのである⁹。ただ、これは宣教の方法に関してであって、カトリックに対して親近感を持っていたというわけではない。プロテスタントに対しては概ね厳しい眼を持っていた。それが顕著に現れたのは、日露戦争の時期であった。日英同盟に基づいてプロテスタントの宣教師の多くが日本びいきで、ロシアを嫌悪する傾向があったからでもあった。プロテスタントの信仰そのものに対しても厳しい見方をしている。1907（明治40）年12月31日の日記には、この年を振り返って正教会には宣教の実りが少なかったことを認める一方、プロテスタント特に組合派の成果について、「果たして彼らの成功はその通りだろうか。どこか疑わしい。彼ら自身は、成功は自分たちに広い信仰の自由があるからだとしている。だれが何を信じてよい、キリスト教徒でありさえすればいいということだ。キリストを神として信じようが、単なる教師としてだろうが、聖三位一体を信じようが、信じまいが、『福音経』の奇跡を認めようが、それらを敬虔なる作り話だと考えようがいいとしているのである。正教会の扉もそういうふうに広く開け放せば、少なからぬ者がそこから入ってくるだろうとも思えるが、そんなことは長もちするだろうか……どれほど多くのプロテスタントの信徒が信仰を捨てているか……プロテスタントでは、疑問の余地なき教理という確固たる根拠に基づかない、中味のない教えを貧弱にしか与えられないことのために離れるのである」とある。

これに対し、英国教会系の聖公会とは親しい関係があった。日記には多くの聖公会宣教師が登場する。1873年に東京に来た英国教会宣教師のW.B.ライト（ニコライは仲がよかったと記している）、正教会の聖歌隊に加わって聖歌を歌うまでにニコライに親近感を持ったアメリカ系聖公会のH.ジェフェリス、聖公会の司教W.オードリー（1896年来日。ニコライと親しい関係にあった）、英国聖公会宣教師A.キングなどである。

聖公会関連では興味深い動きがあった。英国教会と東方正教会の連合の動きがジェフェリスを通じてニコライに持ち込まれた点である。1907年11月

⁹ 中村健之介『宣教師ニコライと明治日本』、57-58頁

8日の日記には、「英国教会・東方正教会連合」(The Anglican and Eastern Orthodox Churches Union) 書記より来信があり、「“当連合全体委員会は、あなたがわたしどもの団体に加わることに同意されたとの Mr. Jefferys [ジェフェリス氏] の通知に励ましを受けました。敬意を表します。あなたは当協会の後援者に選ばれました” 等々、述べられていた」とあり、「この連合ははなはだ好感のもてる、神によみせらるものだ。どうかこの会がうまくいくように」との感想も述べられている。1908年1月4日の日記では、ニコライは合同の望みに期待する一方で、「だが、だれが英国教会の高慢を押しえつけるのか。それなくして合同はない。キリストの真の教理を捨てて、われわれが彼らのもとに行くのではなく、彼らの方がそれらの教理を受け入れてわれわれのもとにやって来なければならない」と英国教会ペースで進むことに反対の意思を示している。結局、この動きはそれ以上進まなかった。

③非宗教思想との関係

政治的・思想的立場では、ニコライは保守的であった。母国ロシアの皇帝のみならず日本の天皇にも敬意を払った。ニコライが日本にいる間のロシアは、1861年の農奴解放以降も農村改革や工業化のテンポが遅れ、ナロードニキの農村啓蒙運動があったが政府の弾圧を受け、政治的自由化の遅れへの不満が無政府主義者による皇帝暗殺まで誘発した。政情は徐々に不安定になり、日露戦争最中の1905(明治38)年1月には「血の日曜日事件」が発生している。1905年の日記を見ると、祖国での動きに苛立ちや嘆きを見せる場面がしばしば登場する。捕虜の中に一部革命的思想の持ち主がいて反政府的な扇動をしていることには警戒心を隠していない。関連して、ニコライは日本との戦争についてどのようにみていたかも興味あるところであるが、日記にはかなり率直に書いている。大陸国としてのロシアが海にまで勢力を伸ばして戦争をおこなうことは愚かなことであるといったものである。

Ⅲ. 日露戦争時のニコライ

A. 日本に留まることにしたニコライ

日露戦争中ニコライはどのように過ごしたのだろうか。結論から先に述べると、日本教会と信徒たちを守るため日本に留まると同時に、続々と送ら

れてくるロシア軍捕虜たちの世話を懸命におこなった。そしてこの間も日記を綴っており、それは日露戦争時の歴史研究に貴重な資料となっている。

戦争が始まろうとする1904(明治37)年2月6日の日記によれば、駐日ロシア公使ローゼンが公使館員とともに日本を退去することになったことが伝えられ、ニコライはどうするか問われた。その折りのニコライの心境は複雑であった。日本政府は日本に留まるロシア人の身の安全は保証しているから、残る、残らないは自分の判断しだいとした上で、率直に心情を吐露している。「利己心から言えば、ロシアへ帰りたい。もう23年以上もロシアへ帰っていない。長い単調な仕事から離れて休みたい。しかし、教会の利益は、ここに残ることを命じている」と。その後も再三帰国を勧められるが、「敵国」ロシアからもたらされたキリスト教を信ずる日本人正教徒が苦境に陥ることが明白な状況では帰ることはできないと心に決めたのであった。日本人教役者たちも集まりをもってニコライに残ってもらいたいとの願いを伝えた。これに対するニコライの答えの中に興味深いものがある。「しかし、戦争が終わるまでは、みなと一緒に聖体礼儀に加わることはしない。その理由は、聖体礼儀においてわたしは、あなた方とともに、日本の天皇のために、その勝利のために、その軍隊のために祈ることになるからだ……あなた方だけで聖体礼儀を行ないなさい。そしてあなた方の天皇、その勝利とのために真心をこめて祈りなさい。祖国を愛するのは当然であり、その愛は神聖なものなのだ」というもので、戦争時には自国の勝利を祈ることになっている正教においては、ロシア人のニコライと日本人正教徒では立場が異なるということを背景に、ニコライの苦衷が示されているのである。ロシア公使館が実質閉鎖となることから、ロシア政府などからの連絡等はフランス公使館が行うことになった。

こうして日本に留まったニコライは、神田の聖堂と宣教団の建物で過ごさねばならなくなった。この頃からロシア以外の在留外国人がロシア人を避けるようになったようだが、フランスがロシアと友好関係をもっていることを理由に、弘前の仏人カトリック宣教師が“露探”視され、“とぼっちり”を受けることがあったとも記されている(3月1日日記)。

B. 戦争時日本人正教徒は迫害されたか

1904年2月10日に日本が宣戦布告した二日後の日記を見ると、函館の教会の教役者など教会所属の建物に住む者たちが“露探”として24時間以内の退去を命じられ、ニコライは苛立ちを示している。これに関連して函館の信徒たちは動揺し、怯えた何人かは脱会した。信徒たちが教会に集まることも禁止されたこと、函館市民のあいだでは「正教徒＝ロシア」の意識が固定化しているとの現地の司祭の知らせを日記に記している。

このほか関連事項を列挙してみる。ニコライあるいは教会が直接狙われる動きがあったこと（好戦的大演説会でニコライを退治しなければならないとする演説があり、30人の警官が教団の警護についた）、一部の仏教の僧侶たちの間にニコライを敵視して扇動する行動があったこと、戦後結ばれた日露講和条約（1905年9月5日）の内容に不満を持った勢力が日比谷公園で講和反対国民大会を開き、政府系新聞社、交番などが焼き討ちされたという「日比谷焼き討ち事件」の際、暴徒の一部がニコライ堂まで押し寄せてきたこと（結果的には警察、軍の警護が厚かったため被害は出なかった）、ニコライ暗殺計画もあったことなどが日記から読み取れる。

地方の教会は戦時中どうであったか。日記を読む限り、概ね迫害は目立たなかったが、一部に村八分扱いとも見える迫害があった。静岡の萱間（現袋井市）の、土地を借りていた信者の5家族が土地の立ち退きを求められ、北海道への移住を考えなければならなくなったケースである。この件は幸いにも萱間の当局が調停に入ってくれたことで無事決着した。ニコライが励まされるような地方信徒の様子も日記にはある。阿久津（福島県）と水戸の信徒たち、続いて柏崎（新潟県）の信徒が訪ねてきて、戦争が教会の活動に妨げになっていないこと、「戦争と信仰は別物です。戦争は地上のことで、信仰は天上のことです。みな、それを承知しています」とのことばを耳にして喜んでいる（1905年4月9日の日記）。

C. ロシア軍捕虜に対する配慮にかかわる問題

1905年1月1日ロシア軍が旅順で降伏を申し出た結果、兵士の捕虜は急速に増加し、日本各地にロシア人捕虜収容所が生まれていった。さらに、ロシア側から見ると3月10日奉天が日本軍に占領され、5月27日バルチック

艦隊が敗れ、7月31日樺太でも降伏した。それに伴いロシアの捕虜は増えつづけた。最終的には8万人弱に及んだとされている。

捕虜の大半が正教徒であることから、彼らの霊的ケアをニコライ以下日本の正教会が担うことになったが、大問題であった。全国29箇所に収容されている正教徒の捕虜たちの奉神礼をどのように執り行うか、彼らの「痛悔機密（告悔）」に関しロシア語の分かる日本人聖職者が足りないという問題、正教徒にとっての最大の祝祭である復活大祭をどのように祝わせるか、などである。ニコライは東京を離れることができなかったから、懸命に必要な指示を与えるとともに、東京でできる最大限のことを行った。それは、不足していたロシア語の分かる聖職者が10人ほどしかいない問題に関して、急遽神学校卒業生でロシア語の分かる者を司祭、輔祭に叙聖することであった。一方、ロシア語の出来た長司祭シメオン三井〔道郎〕（1891年の「大津事件」では負傷した皇太子ニコライの通訳を務めた）はこの時期癲癇の発作に見舞われ、健康上の不安を抱えていたが、各地のロシア軍捕虜の収容地を巡回し奉神礼を行って行くことで、健康が回復した。しかし、ロシア人のところで奉神礼を行える日本人聖職者が少ないうえ、掛け持ちということから、3000人収容の習志野で復活大祭の奉神礼を捕虜たちが自分で行うといったケースも生まれた（5月4日の日記）。

「痛悔機密」に関連しては以下の二点で対応を迫られた。第一に、ロシア語でなされる捕虜の告白をロシア語の分からない日本人聖職者が聞いて、有効となるかという問題であった（そのような場に立たされた聖職者からの問い合わせがあった）。これに対するニコライの答えは、告白者が瀕死の状態に置かれているような場合を除いては基本的に認められないというものであった。となれば、多数の信徒への「痛悔機密」はどうするのかという第二の問題が生じてくる。捕虜の中に、当時のロシアで多くの信者が集まっていたサント・ペテルブルグのイオアン神父（「クロンシュタットのイオアン」として知られる）のところで非常に大勢の信者が同時に一斉に告白するという「共同痛悔」あるいは「一斉痛悔」とも言うべき痛悔を経験したものがいて、そのような方式での痛悔を希望したため、日本人司祭からニコライに可能かどうかの問い合わせが寄せられている。ニコライはこれに対し、司祭が足りない状

況では可能であると返事するとともに、それをおこなうためのパンフレットを印刷して各地に送っている¹⁰。

終わりに

『ニコライ日記』を通し宣教師ニコライの活動について、われわれの問題として思い巡らせられる点を上げて、まとめとしたい。

①ニコライの宣教は非常に大きな実績を上げた

召天した時点で3万4千人の信徒が残されており、まったくゼロからの出発であったことからすれば、相当な数であろう。157人の伝道者、460にのぼる礼拝施設というのも大きな数である。

また、聖書をはじめとする各種祈祷書の翻訳の面でも大きな成果を挙げた。ただ、翻訳自体は日本語として一般信徒或いは未信者には必ずしも易しいものではない。それは、ニコライに荘重さを保ちたいという思い、仮に難解であっても理解しようという心を持って読んでもらいたいという考えがあったことによる。一般的には“分かりやすい”ものがいいとされ、そのための努力が推奨されるが、ニコライの場合は“分かりやすさ”が優先されることで本来の意味が損なわれることは厳に慎みたいとしたということである。奉神礼・諸祈祷において儀礼的要素、宗教性を非常に大切にしたことともつながっている¹¹。

¹⁰ 拙稿「日露戦争期の復活大祭めぐり宣教師ニコライが直面した問題について——『ニコライ日記』から1905年の復活大祭を再現」、「中京大学図書館学紀要 (27)」を参照されたい。

¹¹ ニコライの翻訳した聖書は、『日本語ヘクサプラ The Japanese Hexapla』（エルピス）により他の訳と比較しながら読むことができるが、一部「ヨハネによる福音書」冒頭部分のニコライ訳を挙げてみたい。「イオアンに因る聖福音」第1章 1太初（はじめ）に言（ことば）有り、言は神と共に在り、言は即（すなはち）神なり。2是の言は太初に神と共に在り。3萬物は彼に由りて造られたり、凡そ造られたる者には、一も彼に由らずして造られしは無し。4彼の中に生命有り、生命は人の光なり。5光は暗（くらやみ）に照り、暗は之を蔽（おほ）はざりき。6神より遣されし人あり、其名はイオアンなり。7彼は證（しょう）の爲に來り、光の事を證し、衆人をして彼に因りて信ぜしめん爲なり。8彼は光

②宣教方針には学ぶべきものが多々ある

そもそも正教という教派の特徴は、使徒の伝承を大切にす古代性にあるが、具体的には儀礼的であり、前近代的である。ニコライはその点を崩さなかった。しかし、封建時代が終焉し、西欧に倣って近代化を進めようとし始める時代の日本においては、そうした姿勢は一見マイナス要素になりそうであった。事実、プロテスタントやカトリックは近代化を助けるように教育・啓蒙活動、社会事業活動と結びつけた伝道を展開し、成果を挙げていった。ニコライの宣教方針においては、前近代性、土臭さ、宗教性を保つことによって、近代的合理主義精神に大きく影響を受け、キリスト教本来の聖性・靈性を失っていると批判的に見ていたプロテスタントと対極的なものが打ち出されたように思われる。正教の伝道は都会型ではなく、地方型ともいえよう。地方住民の宗教性を生かす伝道が進められたとでもいえようか。そうした前

に非ず、乃（すなはち）光の事を證せん爲に遣されたり。9眞の光あり、凡そ世に來る人を照す者なり。10彼嘗（かつ）て世に在り、世は彼に由りて造られたり、而して世は彼を知らざりき。11己に屬する者に來り、而して己に屬する者は彼を受けざりき。12彼を受け、其名を信ずる者には、彼神の子と爲る權を賜へり。13是れ血氣に由るに非ず、情欲に由るに非ず、人欲に由るに非ず、乃（すなはち）神に由りて生れし者なり。14言は肉體と成りて、我等の中に居りたり、恩寵と眞實とに満てられたり。我等彼の光榮を見たり、父の獨生子（どくせいし）の如き光榮なり（インターネット百科事典ウィキソース、項目「正教会訳新約聖書」から）ちなみにニコライ訳新約では、ロシア語聖書と同様に福音書、使徒行伝、ヤコブ・ペテロ・ヨハネ・ユダの書簡、パウロの書簡、ヘブル書、黙示録の順で、以下の名称・配列となっている。マトフェイに因る聖福音、マルコに因る聖福音、ルカに因る聖福音、イオアンに因る聖福音、聖使徒行實、イアコフの書、ペトルの前書、ペトルの後書、イオアンの第一書、イオアンの第二書、イオアンの第三書、イウダの書、ロマ人に達する書、コリンフ人に達する前書、コリンフ人に達する後書、ガラティヤ人に達する書、エフェス人に達する書、フィリッピン人に達する書、コロサイ人に達する書、フェサロニカ人に達する前書、フェサロニカ人に達する後書、ティモフェイに達する前書、ティモフェイに達する後書、ティトに達する書、フィリモンに達する書、エウレイ人に達する書、神学者イオアンの黙示録。

近代性の故に、ロシア革命の影響等も加わってその後は衰退していったが、最近では活動が徐々に活発化してきている。われわれは今日ポスト・モダンの時代にあって自己吟味を迫られているとき、ニコライの声に耳を傾けることも益なしとは言えないのではないか。プロテスタントのうちニコライは、信仰の近代化、神秘性・儀礼性の欠如、それらに伴う信仰の倫理規範化を見ていたのである。つまり、宗教性が薄められたことにより、世俗化しているとも見ていたのである。筆者も近年のわれわれの教会のありようについては、文化主義的になり、世俗世界との境界があいまい化してきているように思われている。ニコライが世俗文化への妥協をしない姿勢を大切にしたことには、学ぶべき点があるのではないだろうか。

本文で触れたように、信徒伝道者を育成し、また用いた点も重要である。正式な聖職者ではない伝教者という身分を設け、基本的な教育を施し、且つ少ないながらも給与を出して伝道の一線に送り出していったのである。彼らが伝道に燃えていたことは、伝道の進展ぶりによく現れているが、伝道により彼ら自身が恵まれていったのであろう。彼らは草深き地域に入り込んでいった。その伝道は愚直でもあった。だが、伝道はそもそも愚直なものなのであろう。正教会は一般向けのミッション・スクールは作らなかった。また、文化的、啓蒙的活動もほとんど行わなかった。この姿勢は時代によっては非常に目立たない、それがゆえに伝道の沈滞化を招くこともあったが、時代性に左右されないどっしりとした面を持ち合わせているように見える。われわれはどうか、自己吟味する必要がある。

③ 「ニコライ日記」はわれわれも読む価値のあるものである

一人の宣教師が生涯をかけて伝道し、その間に丹念に綴り続けた日記にはさまざまな点での情報が満ちている。日本における宣教の歴史を見る際に、避けて通ることのできないものであろうし、日本人の精神状況、日本の文化状況のなかでどのように宣教を進めていけばよいかという大命題を考える上でも、多々示唆を与えるものとなろう。また、われわれプロテスタントはカトリックをはさんできわめて対極的な位置にある正教会のことを知る機会が少なく、さまざまな面で考慮の対象とはしてこなかった。対極的であるがゆえに、自己吟味する上で考慮する必要、そこから学ぶこともあるのではない

か、日記はそのようなことを投げかけているようにも思われる。

(中京大学教授、福音主義神学会中部理事長)